



マサバ（対馬暖流系群）①

資料 2 - 3

2022年12月23日公開

マサバは日本周辺に広く生息しており、本系群はこのうち東シナ海～日本海に分布する群である。

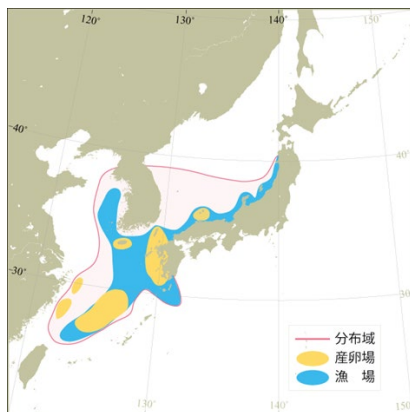


図1 分布域

東シナ海南部から日本海北部沿岸域、さらに黄海や渤海まで広く分布する。

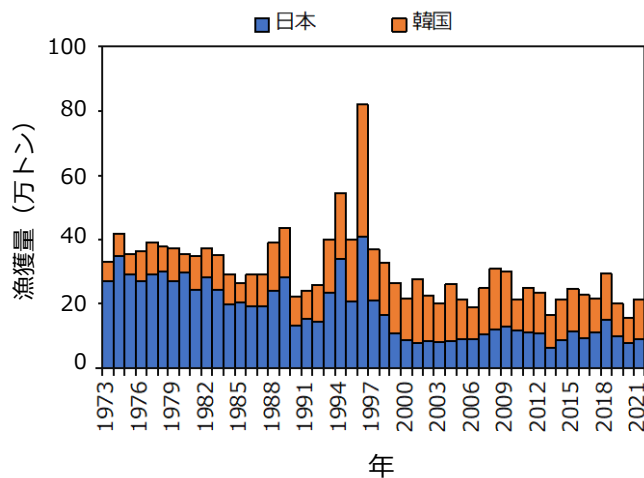


図2 漁獲量の推移

日本と韓国を合わせた漁獲量は、1970～1980年代は安定していたが、その後減少し、1996年に急増したあと、再び減少した。2000年代以降はほぼ横ばいであり、2021年は21.3万トンであった。そのうち日本は9.1万トン、韓国は12.2万トンであった。

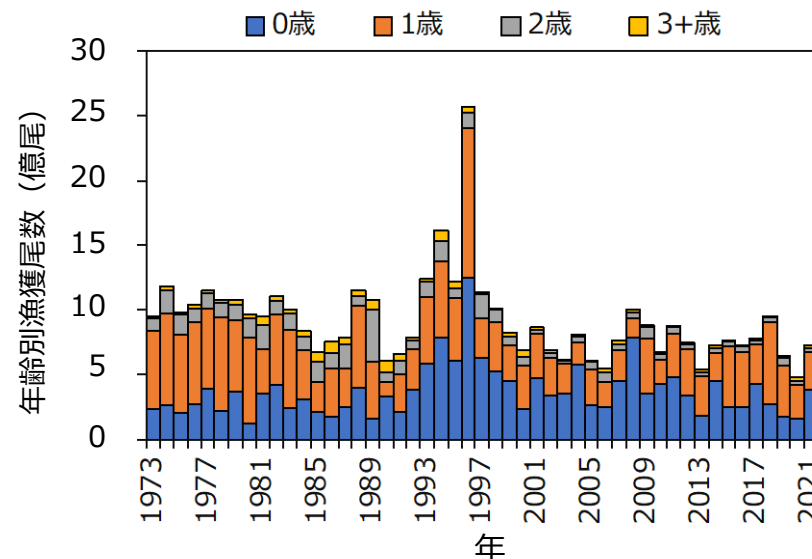


図3 年齢別漁獲尾数の推移

漁獲物の年齢組成を尾数でみると、0歳（青）、1歳（オレンジ）を中心に構成されており、2歳魚以上が占める割合は少ない。

マサバ（対馬暖流系群） ②

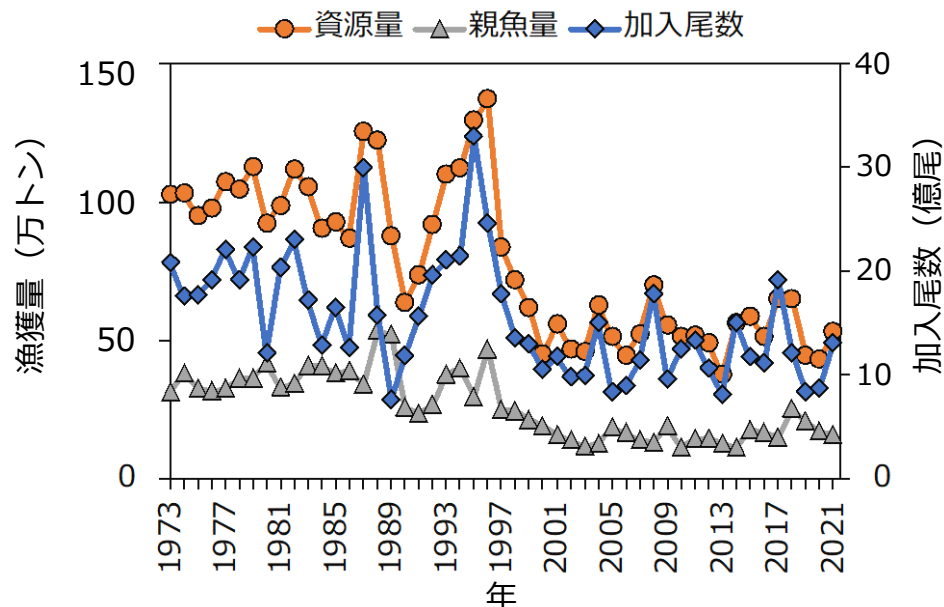


図4 資源量・親魚量・加入量

資源量は2013年に最低の37万トンを記録して以降、2018年に65万トンまで回復したが、2019年以降再び減少し、2021年は53万トンであった。加入量は2019～2020年は低かったが、2021年は13億尾と推定された。親魚量は直近5年間（2017～2021年）でみると横ばい傾向で、2021年には16万トンであった。

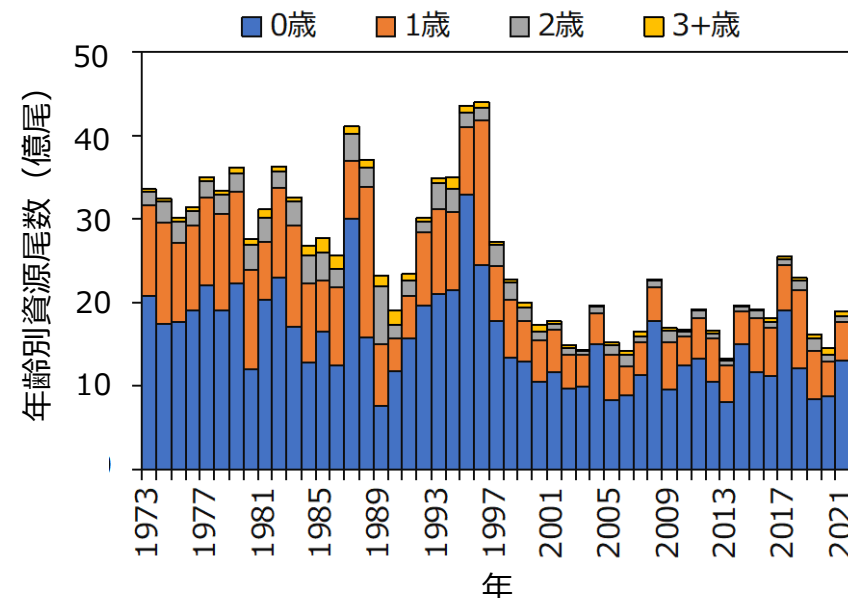


図5 年齢別資源尾数

0歳魚と1歳魚の占める割合が高い。2010年以降、0歳魚尾数は2017年は19億尾と多かったが、2019年と2020年は8億～9億尾と少なかった。

マサバ（対馬暖流系群） ③

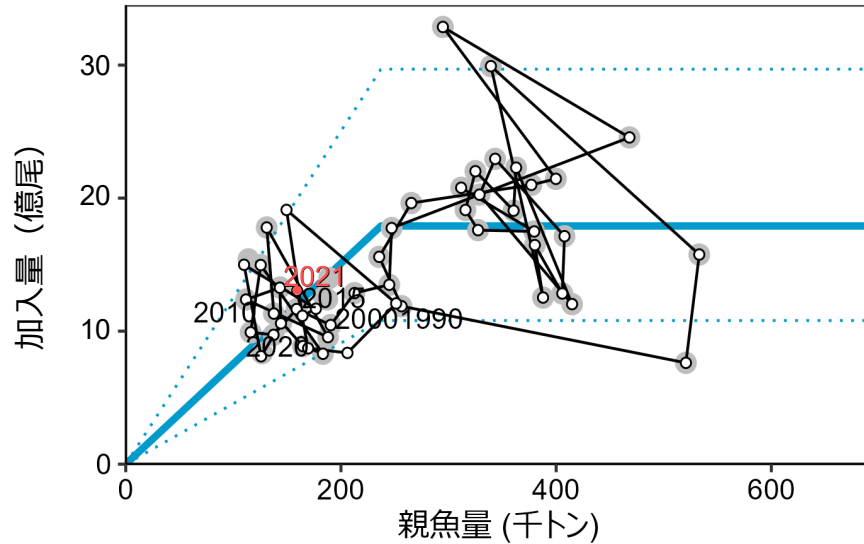


図6 再生産関係

1973～2017年の親魚量と加入量の情報に基づくホッケ－・スティック型の再生産関係（青太線）を適用した。図中の青点線は、再生産関係の下で、実際の親魚量と加入量の90%が含まれると推定される範囲である。

灰丸は再生産関係を推定した時の観測値、白丸は2022年度資源評価で更新された観測値である。

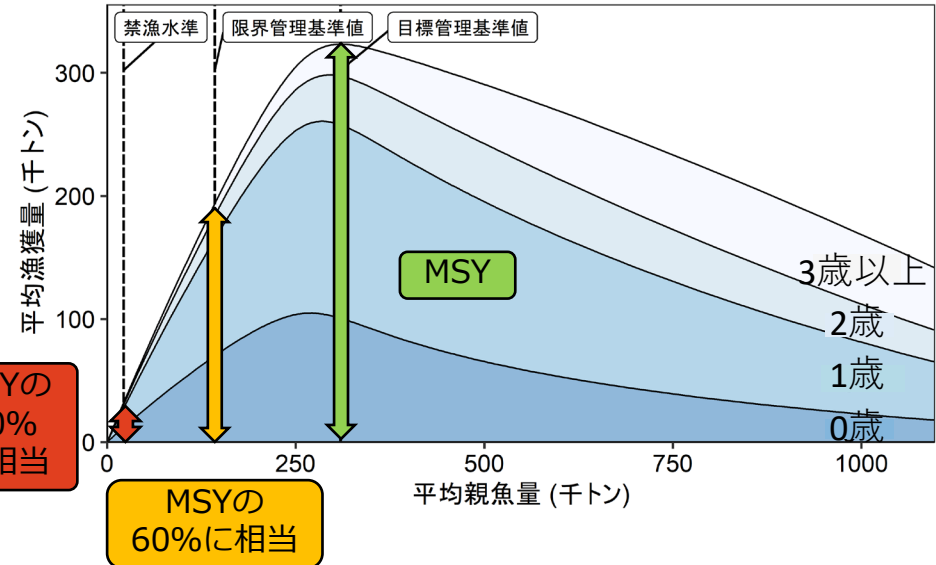


図7 管理基準値と禁漁水準

最大持続生産量（MSY）を実現する親魚量（SBmsy）は、31.0万トンと算定される。目標管理基準値はSBmsy、限界管理基準値はMSYの60%の漁獲量が得られる親魚量、禁漁水準はMSYの10%の漁獲量が得られる親魚量である。

目標管理基準値	限界管理基準値	禁漁水準	2021年の親魚量	MSY	2021年の漁獲量
31.0万トン	14.3万トン	2.2万トン	15.9万トン	32.3万トン	21.3万トン

マサバ（対馬暖流系群） ④

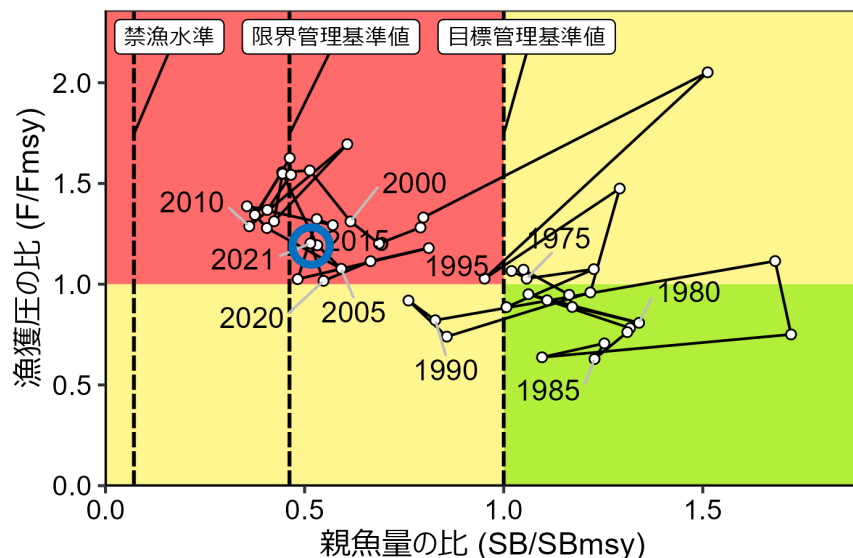


図8 神戸プロット（神戸チャート）

漁獲圧（F）は、1980年代は概ね最大持続生産量（MSY）を実現する漁獲圧（Fmsy）を下回っていたが、1994年以降はFmsyを上回っている。親魚量（SB）は、1980年代は最大持続生産量を実現する親魚量（SBmsy）を上回っていたが、1997年以降はSBmsyを下回っている。

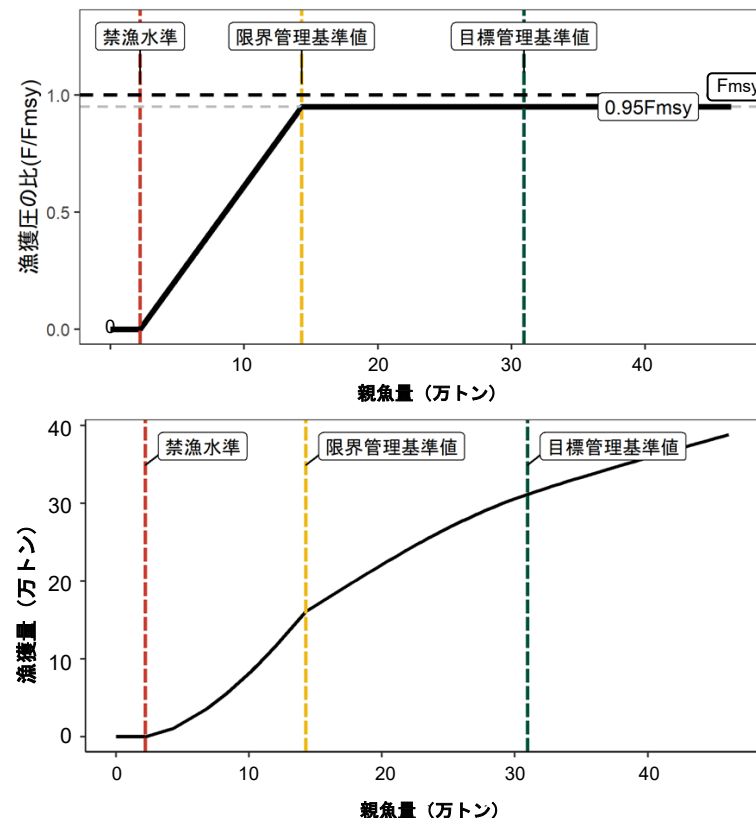
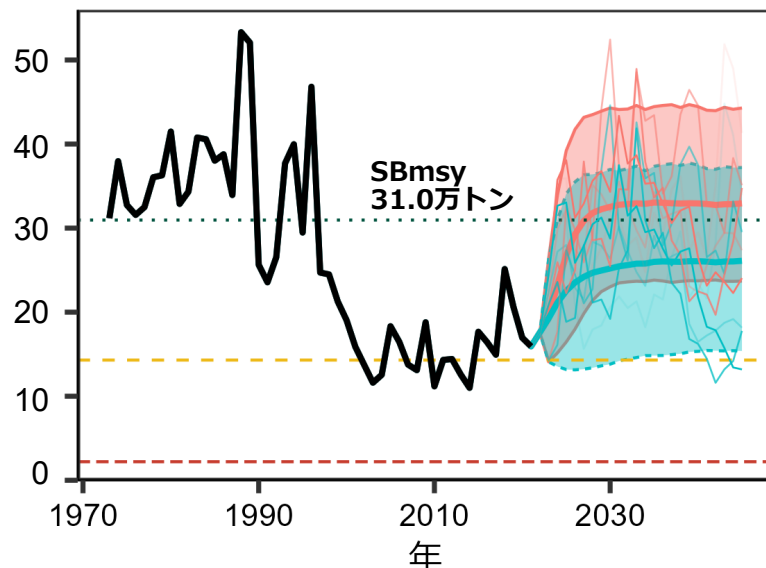


図9 漁獲管理規則（上図：縦軸は漁獲圧、下図：縦軸は漁獲量）

Fmsyに乗じる調整係数である β を0.95とした場合の漁獲管理規則を黒い太線で示す。下図の漁獲量については、平均的な年齢組成の場合の漁獲量を示した。

マサバ（対馬暖流系群） ⑤

将来の親魚量（万トン）



将来の漁獲量（万トン）

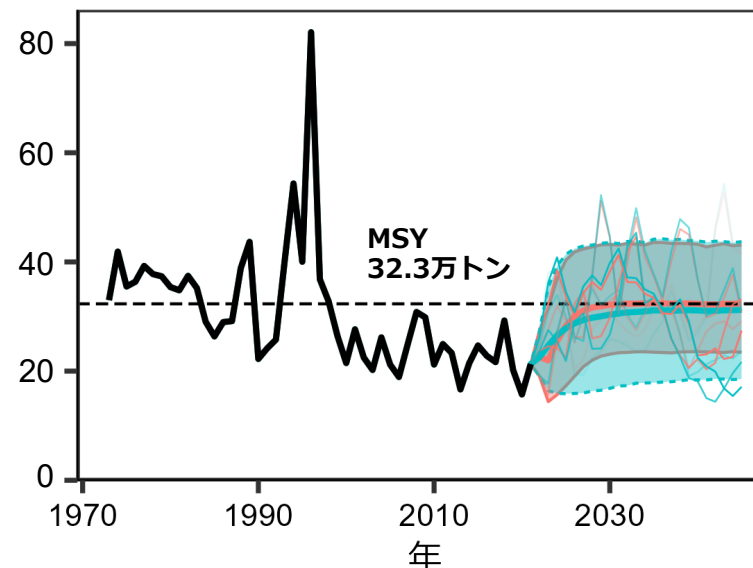


図10 漁獲管理規則の下での親魚量と漁獲量の将来予測（現状の漁獲圧は参考）

β を0.95とした場合の漁獲管理規則に基づく将来予測結果を示す。

0.95 F_{msy} での漁獲を継続することにより、平均値としては親魚量は目標管理基準値以上に、漁獲量はMSY水準へ推移する。

- 漁獲管理規則に基づく将来予測
($\beta=0.95$ の場合)
- 現状の漁獲圧に基づく将来予測

実線は予測結果の平均値を、網掛けは予測結果（1万回のシミュレーションを試行）の90%が含まれる範囲を示す。

- MSY
- 目標管理基準値
- 限界管理基準値
- 禁漁水準

マサバ（対馬暖流系群） ⑥

表1. 将来の平均親魚量（万トン）

				2030年に親魚量が目標管理基準値（31.0万トン）を上回る確率							
β	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	
1.00	15.9	17.6	19.3	22.6	25.5	27.5	28.9	29.8	30.2	30.5	43%
0.95	15.9	17.6	19.3	23.3	26.8	29.3	30.9	31.8	32.2	32.5	56%
0.90	15.9	17.6	19.3	24.0	28.1	31.1	32.9	33.9	34.3	34.6	69%
0.80	15.9	17.6	19.3	25.4	31.1	35.0	37.2	38.3	38.7	38.9	89%
現状の漁獲圧	15.9	17.6	19.3	21.1	22.5	23.5	24.2	24.7	25.0	25.2	19%

表2. 将来の平均漁獲量（万トン）

β	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030
1.00	21.3	22.6	22.8	25.9	28.3	29.9	30.9	31.5	31.8	32.1
0.95	21.3	22.6	22.0	25.5	28.3	30.0	31.1	31.6	31.9	32.2
0.90	21.3	22.6	21.1	25.1	28.2	30.0	31.1	31.6	31.8	32.0
0.80	21.3	22.6	19.4	24.0	27.6	29.6	30.6	31.0	31.2	31.3
現状の漁獲圧	21.3	22.6	15.5	20.8	25.0	27.2	28.2	28.7	28.8	29.0

漁獲シナリオに基づき漁獲した場合の平均親魚量と平均漁獲量の将来予測を示す。漁獲シナリオでは、 β に0.95を用いた漁獲管理規則で漁獲を行う（赤枠）。2022年の漁獲量は、予測される資源量と現状の漁獲圧（2019～2021年の平均： $\beta = 1.12$ ）により仮定した。この漁獲シナリオに従うと、2023年の平均漁獲量は22.0万トン、2030年に親魚量が目標管理基準値を上回る確率は56%と予測される。併せて、 β を0.8～1.0の範囲で変更させた場合と現状の漁獲圧を続けた場合の将来予測結果も示した。

表3. ABC要約表

2023年のABC （万トン）	2023年の親魚量予測平均値 （万トン）	現状の漁獲圧に対する比 （F/F2019-2021）	2023年の漁獲割合 （%）
22.0	19.3	0.85	35

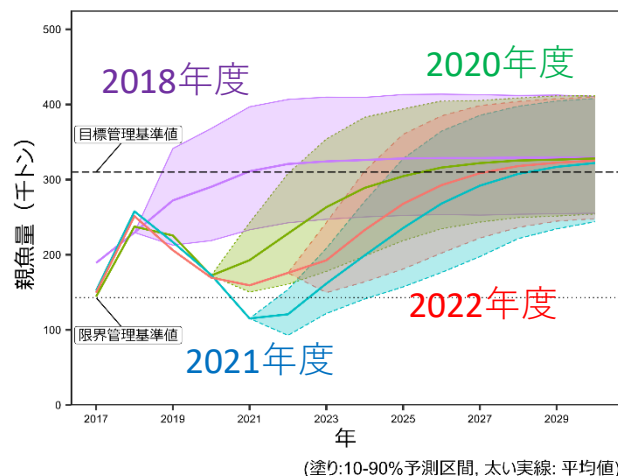
※上記の表は暦年（1～12月）の値であり、2023年漁期（7月～翌年6月）のABCは24.4万トンである。
表の値は今後も資源評価により更新される。

昨年度評価との比較

マサバ

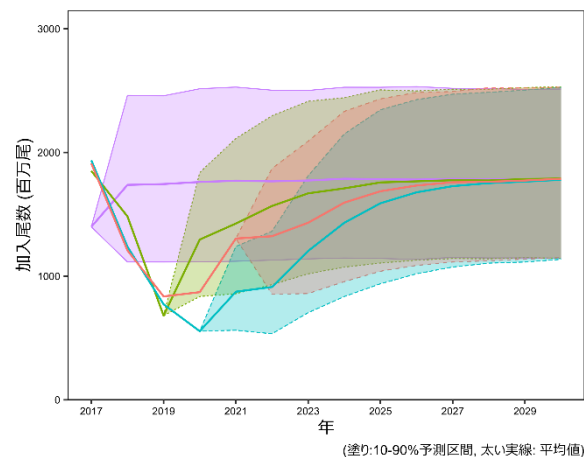
■ 親魚量

今年度評価 一昨年度評価
昨年度評価 研究機関会議



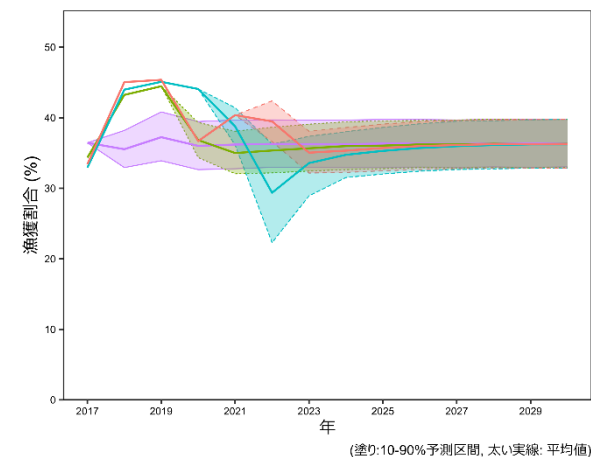
■ 加入量

今年度評価 一昨年度評価
昨年度評価 研究機関会議



■ 漁獲割合

今年度評価 一昨年度評価
昨年度評価 研究機関会議



2020年まで親魚量の推定値に大きな変化はない

2020年の加入量が上方修正 → 2020年の資源量が上方修正

2021年に1歳魚が漁獲されたことによる。加入量是不確実性が高い

現時点で管理方針を見直す必要はないと考える

2021年の加入は平均的、2022年の加入も低くないとみられる

漁獲管理規則に従えば、目標管理基準値に2028年に達する

ただし、資源回復の兆候が明確とはまだ言えないため、慎重な管理が必要